

「一人光る。皆光る。何も彼も光る」

これは陶芸家の河井寛次郎氏が遺した言葉です。株式会社イエローハットの創業者・鍵山秀三郎氏は、この言葉を受けて、「どんなに汚れたところでも、どんなに粗末な物でも、きれいに磨けば、それなりの光を放ってきます。それをコツコツやった人も光ってくる。光れば、そのひたむきな姿を見て、賛同者つまり同じ志を持つ波長の合う人が現われてくる。続けているうちに、いつのまにか皆が光ってくる。さらにそれを徹底していくと、ついに回りの何もかもが光り出すのです。まず自分から何も求めず無心で行なうことが尊く、大きな働きを生み出すのです」と話しています。

今週は「清掃」にまつわる、ある女性の体験事例から学びたいと思います。

H市に住むY子さんは、中学校の教諭を務めています。以前は「家の中は少々汚れても気にはしない」という暮しぶりでしたが、ある日、友人に誘われて倫理研究所が主催する朝の勉強会に参加しました。

初めて訪れた会場に一步入った瞬間、目の前の光景にハッとさせられました。先に会場に来ている方々が、床をピカピカに磨き上げているのです。Y子さんはその様子を見て、感ずるところがありました。

その後、転任した学校で、さっそく実践を始めました。早朝に出勤後、すぐに職員室の先生方のゴミ箱を収集し、ビニール袋に詰めて廊下のゴミ収集ボックスへ出すという、たった五分もあれば終わる実践です。



清掃は自分育ての道 私情を捨て心を磨く

先生方からは恐縮されましたが、「地球に優しい、ちよつとしたことですから、気にしないでください」と言つて、毎日続けました。周囲の人々からは「毎朝ゴミ箱が空っぽだと気持ちがいいですね!」と喜ばれ、ゴミの多い日は何人かの先生方にも手伝ってもらえるまでになりました。

やがてY子さんは、校内も見回るようになりしました。するとタバコの吸殻などを発見することができ、生徒たちの問題行動までが早めに把握できるようになりました。職員室も見違えるように清潔になり、年末の大掃除の際には三十年近くも「開かずの間」だった教材倉庫を、職員・生徒総動員で清掃することになりました。

清掃を終える頃には参加した全員が気分爽快になり、驚いたことに「学校をキレイにしよう」という新しい風までもが巻き起こったのです。「Y先生の「ゴミ集めを見て、清掃の大切さに気づきました」と、教務主任からはお礼の言葉もかけられたのです。

清掃は「汚い物を嫌う自分を捨てる」「汚した人を責める心も捨てる」「労力を出し惜しむ怠惰な我を捨てる」「知識や経験や立場や年齢にこだわる偉そうな自分をも捨てる」など、いわゆる「私情雑念」を捨て去る道にも通じます。

場を掃き清めようとする心は、自己の心を美しく清らかな状態にする心につながってきます。あらためて、普段は行なっていない場の清掃に、果敢にチャレンジしてみたいかがでしょう。

え・栗木 映